

Okinawa Sumo at Kume Island

はじめに

波上の角力大会は戦前から県内に知れ渡り、県社祭、奥武山招魂祭のときの大会と並び沖縄三大角力の場所と称せられ、多くの選手やファンから親しまれてきた。多くの選手は、この三大大会の中でも、とりわけこの大会を大きな目標として努力を重ねてきたので、この大会をステップにして名選手がこれまでも多く輩出してきている。

この大会の広場の方から海の方に向かったとき、左横の方に目をやると沖縄角力波上場所歴代優勝力士名という掲示板が視野に入ってくる。

この歴代優勝力士名は、昭和31年(1956年)の優勝者と那嶺伝重に始まり平成5年(1993年)の優勝者玉城昌也で終わっている。奇しくもこの両者は、ともに久米島の出身であるが、この歴代優勝力士名は図らずも久米島という地域をクローズアップさせることにつながっている。

[illegible]

波上に掲示されている歴代優勝力士名

歴代の優勝者の中から、久米島出身の力士名を挙げてみると以下のとおりとなる。

昭和31年 与那嶺伝重
昭和32年 山城清三郎
昭和33年 山城清三郎
昭和35年 山城清三郎
昭和36年 山城清三郎
昭和37年 山城清三郎
昭和41年 伊集盛久
昭和43年 伊集盛久
昭和44年 伊集盛久
昭和46年 伊集盛久
昭和47年 仲村昌英
昭和48年 伊集盛久
昭和49年 伊集盛久
昭和50年 岸本清喜
昭和51年 山里昌英
昭和57年 饒平名智弘
昭和58年 饒平名智弘
昭和59年 饒平名智弘
昭和61年 饒平名智弘
昭和63年 饒平名智弘
平成5年 玉城昌也

ここに挙げた久米島出身の8人の力士は、のべ21回の優勝を果たし、47回の全優勝者のほぼ半数近くを占めている。

このようながんばりに対し、久米島新聞では「沖縄角力のメッカ久米島、(1973年3月25日)あるいは「角力の本場久米島、(1973年7月23日)と呼んでいる。

本稿では、「久米島がなぜ沖縄角力のメッカなどと意識されるほどになってきたのか、これまでの久米島における沖縄角力のあゆみを、沖縄の歴史と関連させながらたどってみることにする。

1. 歴史の中の沖縄角力

沖縄で角力が、いつ頃から行われるようになったのか起源やその歴史を物語る歴史資料は、今のところはっきりしていない。

しかし古老や諸先輩の言い伝えとしてまとめられたものが二つある。

その一つは、伊集盛久氏が、沖縄県角力協会の理事長としてまとめられたものであり、もう一つは大城清功氏が、中学生への角力普及のために執筆した沖縄県中学校体育研究会編「沖縄県版 中学体育実技」(学習研究社)の中の「沖縄県の伝統武道—沖縄角力—(1)歴史」の叙述である。

両者は共に久米島の出身であるが、その叙述はほぼ同じ構成になっている。この叙述は、沖縄角力の歴史的起源に関するこれまでの基本的な理解を示すものとなっているので、大城氏の書いた内容を紹介し、それをもとに検討を進めていくことにする。

「むかしの人々は、野山の石を持ち上げたり、かついだりしてからだを鍛えた。技というより、力を競う時代が14世紀ごろまで続き、やがて大陸との貿易が活発になるにつれて、いろいろな格闘術が伝来してきた。

そのころは琉球王国として安定した時代であったために、人々の暮らしもゆとりが生まれ、町や村では祭りが重要な行事として催された。その余興として力くらべが始まり、やがて力の総合的な競技、そして角力へと発展していった。

沖縄角力は、15世紀には現在の形になっており、武家社会をとおして琉球全域へ広まっていった。その後、19世紀初めに角力好きで名高い「尚瀨王」の登場により、士族と農民の間での競技も行われるほど盛んになった。……」

この内容をもう一度まとめてみると四点に分けることができる。

- ①力比べをする中から、やがて大陸との貿易を背景に、いろいろな格闘術が伝来した。
- ②琉球王国時代に祭事の余興として力比べが始まり、やがてそれが角力へと発展した。
- ③15世紀に沖縄角力は現在の形となる。
- ④19世紀の初め、尚瀨王の時代に士族と農民の間で盛んになっていった。

大城氏は、このほかにも沖縄タイムスの「沖縄大百科事典」において沖縄角力について書いているが、そこで「沖縄角力の起源や歴史に関する前近代資料は皆無に近く詳細は不明……」と記しているところからすると、上述した4点はあくまでも古老や諸先輩方から伝え聞く話ということになるのであろう。

しかし琉球王国時代に生まれ、発展したとされる角力について、歴史資料と照らしあわせながら、何が明確で、何が不明なのかを確認しておく必要がある。

琉球王国時代の1713年に編集された「琉球国由来記」では、その遊戯門の項で、角力が角觥(スマフ)として紹介されている。そこでは、「中華事始」として六国のときに相撲が生まれたこと、「大和事始」として神代のときに建御雷神(たけみかずちのかみ)と建御名方神(たけみなかたのかみ)の力比べがあり、人代においては、當麻足麻速(たいまのけはや)と野見宿禰(のみすくね)が力比べをして、野見宿禰が勝ちを収め、これが人代の

相撲の始まりになるとの内容が紹介されている。この内容は「古事記」や「日本書記」に記されており、琉球国由来記でも引用された形になっている。しかし沖縄における角力の起源についての叙述は、「琉球国由来記」には何ひとつ出てきていない。さらに「球陽」の尚瀬王世代の項をひもといってみても角力についての叙述は見られない。したがって上述した③の「15世紀に沖縄角力は現在の形となる。」や④の「19世紀の初め、尚瀬王の時代に士族と農民の間で盛んになっていった。」が、どこまで正確に歴史を反映しているのかについては、これからの検討課題ということになるであろう。

2. 歴史の中の久米島角力

歴史的に見たとき、沖縄角力についてその起源を示す資料が不十分であることを述べてきたが、久米島における角力についてはどうであろうか。

その手掛かりになるのは、やはり「琉球国由来記」(1713年)、両間切の「旧記」「久米具志川間切例帳」(1831年)などに出てくる年中祭祀の項であろう。そこでは角力のようすが年中行事との関わりで述べられていないかどうかである。

上江洲均氏が、「久米島の年中行事」(沖縄久米島調査委員会編『沖縄久米島』弘文堂)の中で、「琉球国由来記」に出てくる久米島の年中行事をまとめているので、それを見ていくことにする。

- 1月 (報告なし)
- 2月 麦穂祭
- 3月 三月三日
- 4月 山留
アブシバライ
- 5月 稲穂祭
- 6月 稲大祭
年アメ
- 7月 (報告なし)
- 8月 百度御物参
柴差
八月十五夜
- 9月 作物の為御イベ火神御前タカベ
- 10月 龕廻
粟豆初種子
稲大種マキ

11月 アラザウリ

12月 向ザウリ

鬼餅

ここに紹介された行事の中に、角力は出てこない。上江洲氏は、この年中行事の中に記載されていないが当時行われていたもの(正月行事)、記載されているがやがて傳承されなくなったものがあることを指摘し、さらに後に付け加えられていった新しい行事についても触れている。

「これに対し、新しい時代の行事—例えば学校行事や役所の関わる行事、商工会の催す行事といったのが折り込まれ、定着しつつある。その徴候はすでに明治の頃から見られたことである。久米島各地に行われる角力大会はもち論、五月四日の『ハーリー』(爬竜船競漕)も比較的新しく行われるようになった行事である。」(太字は、筆者による。)

このあとで六月の行事「シュク祭」についても触れ、角力はシュク祭の行事に代わるものとして明治10年代に行われるようになったのではないかと述べている。

「六月二十六日には、謝名堂の南謝門大会がある。ナンジャは海の神を祀ったところと言われ、仲原善秀氏によれば、角力大会に変わったのは明治十年代のことで、それ以前は女性による「ウスデーク」舞踊が演じられたという。六月二十六日といえば、「稲大祭」の翌日である。これは『仲里旧記』の記事とも合致するところから本来は「シュク祭」の行事であったに違いない。

五月十五日に島のトップを切って真謝の菩薩堂角力、六月二十五日が儀間の白道角力、翌二十六日の南謝門角力、その後八月十五夜前後まで『角力大会』が続く。かくして女性による『ウスデーク』は姿を消すはめとなった。明治の世変りは、この辺にも大きな影響を与えたのである。」(太字は筆者による)

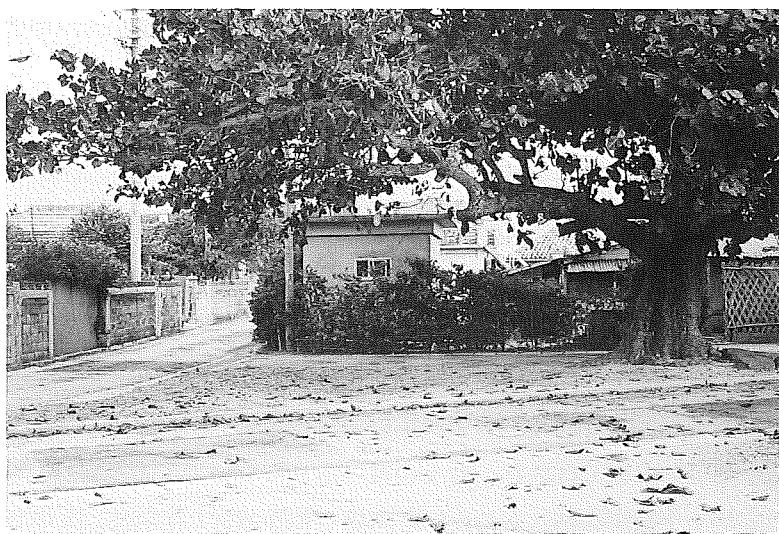
上江洲氏の指摘するところによれば、久米島における角力行事は比較的新しく、謝名堂の角力大会はシュク祭の時に催されるウスデークの代わりに明治10年代から始まってきたということになる。沖縄大学の「郷土14号久米島・仲里村謝名堂調査報告」では、角力はウマチーアシビとして催され、5月は真謝、6月は謝名堂で行われると記している。菩薩堂、白道、南謝門の角力大会のうち、菩薩堂と白道の角力大会がウマチーの余興であるとの理解では一致しているものの、南謝門についてはシュク祭のウスデークに代わるものなのかそれとも稲大祭の余興なのか評価が分かれている。ともあれ角力が、祭と大きな関わりがあるということについては明らかであり、明治の十年代頃から始まったということである。

一方仲原善忠氏の久米島史話によれば「(五月祭の時は、牌屋の前・昔は安谷屋の前の由、六月大祭の時は、当日儀間の白道、翌日、謝名堂のナンザにて、具志川は相撲はないが随

所に闘牛の催し物があるそうである。」と記してあり、真謝の角力が当初は安谷屋の前で行われていたが、やがて牌屋の前に移り、やがて現在の菩薩堂横の広場に移ってきたことが分かる。さらに具志川の西銘や仲地の角力大会が、元闘牛場跡で行われているところを見ると、具志川では当初 闘牛大会が行われ、その後に角力大会が行われるようになったことが考えられる。開催場所はこれまでも変動があり、多いときには12場所近くもあったが、現在の7場所は、これまで紹介してきた真謝菩薩堂全島大会、儀間志良堂（あるいは白道）蔵角力大会、謝名堂角力大会、西銘全島大会、仲地全島大会の五場所に、仲里村まっつりと具志川村まっつりが加わった形になっている。



真謝の菩薩堂角力が行われる天后宮前の広場



儀間の志良堂（白道）蔵角力大会の場所



謝名堂の南謝門角力大会の場所

3. 久米島の沖縄角力

さて次になぜ久米島の沖縄角力が強くなってきたのか、その要因を探ってみることにする。その要因としては、およそ次のことが考えられるのではなかろうか。

1. 角力は祭りに関わりのある娯楽として島内では戦前から親しまれ、諸人角力（すにんじま）の伝統があること
2. 久米島では開催回数が多く、それをステップにさらに沖縄角力協会久米島支部が全島大会へ選手を派遣していること
3. 沖縄角力協会久米島支部の運営する久米島大会での3分制等のルールの採用
4. 角力大会における小・中・高校生部門の設置
5. 私設角力道場の開設による育成指導
6. 支部および地域からの選手推薦等の選手発掘

(1) 諸人角力（すにんじま）の伝統

沖縄大百科事典によると、諸人角力（すにんじま）とは「観衆と審判・力士が一緒になって楽しむ角力で、すべて不文律の内法に基づいて判定する」と紹介されている。

競技規定が初めて成文化されたのは戦後まもない1946年（昭和21年）なので、それ以前の角力は内法に基づいた形で行われ、力士の戦いぶりについて、あるいは行司（審判）の判定について、絶えず観衆の側からの反応も考慮しつつ運営している。

戦前の角力は勝ち抜き制のため、まわりからすると後で試合に出るのが有利なように思

われる。しかし大会に参加する力士の情報は、娯楽の少ない当時 角力の好きな観衆の間では口こみで広がっており、本人がその力にふさわしくない段階で試合に出ることを観衆が許さなかったようである。

(戦前)

久米島においても戦前 諸人角力が盛んであったことは、明治43年生れの宮城幸吉氏の書いた「じまむら」の中にも登場してくる。宮城氏は、闘牛や角力大会などの見物があるときは、その日のために二日分の草刈りをすませていたほど楽しみにしていたそうである。さらに家隣に安里順周という力士が住んでおり、彼が昭和3年の波上大会で優勝したことも記している。

さらに大岳小学校百周年記念誌でも、大岳百年の人物として沖縄角力の力士が紹介されている。

戦前活躍した力士名を挙げると、上江洲智享（山里）、糸数岩堅（鳥島）、橋口勇吉（鳥島）、国吉徳之助（鳥島）、山里昌睦（仲地）、譜久原朝顕（大原）、仲地文英（仲泊）、仲地廣助（西銘）、山里昌作（仲地）、城間清輝（仲村渠）、当原昌仁（山里）、安里次郎（仲村渠）、浜川智弘（上江洲）、仲真良盛（北原）、国吉幸吉（鳥島）、仲村米一（鳥島）、島久雄（西銘）、当間兼通（仲泊）がいる。ここに紹介した力士たちは、具志川村内の選手のみであるが、大正10年頃から昭和16年ころにかけて活躍している。一方仲里村の力士では、吉永安順が嘉手納農林に在籍中の昭和17年ころ本島内の各地の大会で優勝し、さらに戦後も牧志ウガンの大会で二度優勝したほか、首里、糸満、港川の大会でも優勝している。戦後は、沖縄角力協会の会長として組織の強化に力を入れるなど組織人としての活躍も目覚ましい。また昭和3年には、安里順周が波上大会を制している。戦前久米島の力士たちの活躍の場は、主として久米島内の大会であったが、吉永安順、安里順周、上江洲智享の3人は本島大会でも活躍している。その中でも上江洲智享が、1924年10月に県社祭で戦った石川清仁との一戦は、観衆を熱狂させる名勝負で、観衆からの反応により引き分けになったことが記録に残されている。ここにも戦前の諸人角力の良さが表れているようである。

(戦後)

戦後、沖縄角力の大会が再開したのは1948年の年である。長嶺将真氏の「沖縄角力と名人力士伝」によると、1948年にうるま新報主催の沖縄角力選手権大会が牧志ウガンで行われている。

この時に、糸満、知念、コザ、那覇、田井等チームによる団体戦が行われ、糸満チームが優勝を成し遂げているが、そのメンバーの吉永安順、赤嶺昌実、松田福四郎、西銘秀元

の四人はいずれも久米島の出身である。さらにその翌年の同大会に於いても、糸満チームのメンバー全員が久米島出身者で構成されており、優勝旗を久米島に持ち帰っている。またこの大会に於いて具志川村上江洲出身の浜川智弘は審判として参加している。

戦後活躍してきた力士を村別に挙げてみると、仲里村では、吉永安順、松田福四郎、伊集盛久、仲村昌英、饒平名智弘、神谷嘉順、大城清功、山城清三郎、大城学、玉城昌也、大道智らが、具志川村では赤嶺昌実、与那嶺伝重、内間秀一、宇地原清、山里昌栄、安村猛、譜久里学らがいる。

戦後県内の大会に多くの久米島の力士が参加し数多くの優勝を遂げているが、波上大会での山城清三郎の5回優勝、伊集盛久の6回優勝、饒平名智弘の5回優勝など、その名は県下に広く知れ渡った。

久米島の出身者を挙げると

- | | | |
|-------|-----|-------|
| 前列左から | 1番 | 安村 敏夫 |
| | 4番 | 譜久里 学 |
| | 5番 | 伊集 盛久 |
| | 6番 | 大道 智 |
| 後列左から | 1番 | 山里 昌栄 |
| | 2番 | 饒平名智弘 |
| | 8番 | 内間 邦夫 |
| | 10番 | 山城 英明 |



儀間志良堂（白道）蔵大会での角力関係者

一方、吉永安順、伊集盛久、与那嶺伝重の3氏は、沖縄角力協会の役員として、組織の拡充や強化の面でも活躍してきたが、久米島においても支部の組織強化のために多くの方が、運営に加わっている。また大城清功は角力普及のため、中学生向けに角力について執筆するなど、底辺拡大のための功績は大きい。



1994年の牧志ウガン大会に参列する沖縄角力協会の役員。
久米島出身の与那嶺伝重（左から6番目）、大城清功（右端）、
譜久里学（左から4番目）の顔がみえる。

(2) 全島大会への選手派遣

久米島の力士たちが戦前以上に力を発揮し続けてきた背景には、久米島内での多くの場所開催があげられる。この場所開催は変動があり、多いときには12場所あったりしているが、現在では7場所のようである。しかしこの運営を支えているのは沖縄角力協会久米島支部であり、その活動を抜きにしては考えることができない。

沖縄角力協会は、1977年に設立されたが、その翌年には久米島においても支部が結成されている。支部会則によると事業の運営は、「1. 各地域、職場の対抗角力大会、 2. 中・高校対抗角力大会、 3. 沖縄角力選手権大会 4. 東西対抗角力大会、 5. 沖縄角力向上を図るための講習および指導研究、 6. その他本会の目的に必要な事業」の6つで構成されているが、久米島内での場の設定、選手育成、選手派遣など、組織的な取組が成されてきている。

平成元年度の沖縄角力協会久米島支部定期総会での昭和63年度事業実績報告を見ると波之上全島大会で饒平名智弘が、港川まつり全島大会で大城学が、宜野座角力大会で饒平那智弘が、糸満市芸能祭り大会で饒平名智弘が優勝と報告されている。この本島内の大会への参加のため、島外大会派遣費として旅費が組まれており、選手の財政的な側面を支えている。しかし近年は、仲里・具志川両村からの継続的な補助金と並び財政を支える寄付などが減少し、派遣費の捻出が困難となってきた。支部として特に育成に力を注いでいる中学生の大会派遣費に充当すると旅費は不十分で、一般の部の力士の負担する費用が多

くなっている。この現状を、これからどのように克服し、まわりがいかに支援していくのがこれからの課題となってくるであろう。

(3) 久米島大会での3分制等のルールの採用

久米島内の大会をみていると、試合の方法が沖縄県角力協会の沖縄角力競技規定と少し異なるところがある。競技規定によれば、「試合時間は、正味5分間とする。」となっているが、久米島の大会では、「正味3分」となっている。その原因は、大会が祭などの行事の一環として行われているため、時間の調整が必要となってきたところから生じている。しかしそれは逆にプラスの面も生じさせている。

5分という長丁場の角力の場合、一般的には先にしかけたものが不利になりがちだと言われ、終了間際になってやっと攻撃を仕掛けたりする。しかし3分制は時間が少ないため、早くから攻撃を仕掛けないと有利に展開できない。そのため時間の制約が、逆に久米島の力士の技を積極的でしかもスピーディーなものにしていると支部の関係者は述べている。

このほかにも久米島独特の規則がある。沖縄角力競技規定によると「時間延長で勝負がきまらない時は「わざあり」又はわざを多くかけた方を審判合議の上で決め優勢勝ちとする」「二分間の延長で同条件で勝負が決まらない時は後一回だけ二分延長して、攻勢や試合の態度等で判定し、審判合議の上勝負を決定する。」「勝負判定に疑義があったら、副審は速かに手をあげて申し込み、場内に集まって、主審副審合議の上決定する。」など、主審副審の合議制を取っている。しかし久米島においては合議制を取らず、副審が合議のために場所移動することがない。そのため副審の判定が分かれたときには、主審がその責任のもとに判定を下すことになっており、副審と主審のそれぞれがどのような判定を下したのか観衆の側からはっきり分かるようになっている。そのとき観衆の側から判定に対し、何らかの反応があったときは、ケースバイケースで対応することもあるとのことである。この提案は久米島支部の譜久里学によるが、このような形で運営されている久米島の角力には、戦前の諸人角力の伝統が生かされていて、観衆の果たす役割を高く評価している。戦前の上江洲―石川戦のような展開が、戦後もルールの上では久米島では可能である。

(4) 角力大会における小・中・高生部門の設置

久米島の角力大会をおもしろくさせているものの一つに、一般の部に入って戦った高校生力士の健闘があげられるであろう。

仲村昌英は、高校3年のときに久米島大会で一般を下して優勝をとげているが、山城清三郎も、高校3年のときバスケット大会に参加のおり、全島大会に参加して優勝するなどまわりを驚かせている。与那嶺伝重は、久米島での角力大会見物中、引き出され中学3年

のときから角力をとるなど、角力との関わりは早い。これらの事例に代表されるように、小さい頃から生活の中で角力となじんできた若者たちの中からは、一般に伍して戦うものが現れてきている。

このようなことを背景にして、支部の方では若い層への底辺拡大に力を入れている。現在「仲里村まつり」「具志川村まつり」では、小・中・高の学校別・クラブ別対抗戦が行われているが、そのほかにも中学生の団体を波上奉納角力大会などへ派遣するなど組織的な取組が行われている。

(5) 私設角力道場の開設による育成指導

育成指導という観点からみたとき、誰もがいつでも練習に参加できる場の確保は、欠くべからざるものである。

1983年10月15日の久米島新聞によると、仲里村儀間の大道松雄さんが自宅の庭50坪を開放して沖縄角力の土俵をつくり、地域の青年たちに提供しているとある。世話人は、三男の大道智（現在金武在住）で、毎週月曜日と金曜日の午後7時から9時の二時間練習に打ち込み、全島大会で優勝経験のある饒平名智弘選手等25名が参加している。

その後、仕事の関係で智さんが金武へ移動されたあとは、具志川村西銘の譜久里学さんが、自宅の中庭を利用して、地域の小・中・高校生の指導にあたっていることが、沖縄タイムスの「夢中人」という特集で紹介されている。波上奉納角力大会で活躍している具志川中学の選手は、この道場で力をつけてきている。



譜久里学宅の私設道場で、練習に励むメンバー

(6) 支部および地域からの選手推薦

久米島における角力大会を運営し、さらに全島大会へ力士を派遣するためには、選手の大会参加を待つだけではなく、選手を発掘し育てる積極的な対応が必要になってくる。

支部の方では、高等学校・一般青年会推薦選手という字別の名簿を作成しているが、この選手の掌握は久米島における底辺拡大という課題を遂行するとき重要な役割を持つてくると思われる。今後も引き続き支部からの積極的な対応が必要となってくるであろう。

4. 久米島の沖縄角力研究の課題

久米島の沖縄角力を学ぼうとすると、様々な問題が生じてくる。

その一番の原因は、角力に関する歴史的な資料が、現在のところはないという事である。そのため歴史的な起源については、古老や諸先輩方からの聞き取りが、大きな比重を占めてくることになる。久米島における角力の始まりは、仲原善秀氏の述べているところによれば明治10年ころになるが、祭りと関わりのある行事として行われてきている。

明治期のころの力士については明らかではなく、今後聞き取りを行う必要がある。一方 大正から昭和にかけて活躍した力士については、大岳小学校百年記念誌や長嶺将真の「沖縄角力と名人力士伝」から、およそのことは理解できる。しかし前者で紹介されている戦前の本島大会での優勝等については、関係者と照会し確認することが必要であろう。

さらにこれから久米島の角力について研究していく上では、久米島支部の貴重な資料を自ら整理し、自分たちが歴史を築いていくのだという自覚と誇りが必要なのではなかろうか。

* この報告書を作成するにあたり、沖縄角力協会久米島支部のみなさまや久米島出身の多くの方から資料の提供とアドバイスをいただきました。厚く御礼申し上げます。

参考資料

久米島新聞縮刷版

「琉球国由来記」

「球陽」

「仲里旧記」

「具志川旧記」

「久米具志川間切例帳」

上江洲均「久米島の年中行事」(沖縄久米島調査委員会編『沖縄久米島』弘文堂)

沖縄大学「郷土14号 久米島・仲里村謝名堂調査報告」

具志川村史

仲里村史

仲原善忠「久米島史話」

宮城幸吉「じまむら」

長嶺将真「沖縄角力と名人力士伝」(沖縄タイムス連載1983・10～3・19)

「那覇市史 那覇の民俗」

玉城忠「沖縄スポーツ人国記」(琉球新報社)

大岳小学校百周年記念誌

沖縄角力協会久米島支部内部資料